

## ランチタイムレクチャー ダイバーシティって、なんだろう？

ダイバーシティ推進室の存在とその取組み、およびダイバーシティという考え方について、支援スタッフの学生をはじめ、多くの学生に知ってもらうことを目的として、今年度より新たに始まったランチタイムレクチャー。後期は、参加者によるディスカッションの機会を増やすことを目指し、1テーマについて2回のレクチャーを行う形式をとりました。

「学生が主体となった障がいのある構成員支援の取組み」の回では、10月に開催された「日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワークシンポジウム」に参加した支援スタッフ学生が、事前にポスター内容の発表をしたり、シンポジウムで得た他大学の情報をシェアするなど、主体となってレクチャーを行いました。また、「女性専用車両について、ジェンダー論の視点からどう考えられるのか」という学生からの質問をもとに、男女共同参画をテーマにした回で女性専用車両についてディスカッションを行うなど、参加者も受講者としてだけでなく、積極的な主体としてレクチャーに参画する様子が目立ちました。

参加者からは「自分の知らない分野、あるいは知りたいと思っていた分野に関するお話を聞けた点が非常に良かった」「もっと深く聞きたく、お昼だけでは足りないと感じた」などの感想をいただきました。

今後は、支援スタッフ以外の学生にもより多く参加していただけるよう、周知などを工夫しながら開催していく予定です。また、本学のさらなるダイバーシティ推進のために、日野、荒川キャンパスでの開催も検討しています。



## 首都大学東京一時保育施設「首都大 KIDS」

首都大 KIDS のお友達は今も元気いっぱいです！

1月は雪が降り、雪遊びを楽しみました。

保育室では毎月行事やお誕生日会、英語レッスンを行っています。

保育室でお友達や先生と過ごす時間が、子どもたち一人ひとりの宝物になるといいなと思います。

ご利用には事前登録が必要です。詳細はWEBサイトをご覧ください。  
首都大学東京ダイバーシティ推進室 首都大 KIDS のページ  
<http://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/child/index.html>



## 子育ての疑問・悩み相談会 「子育てのココが聞きたい!!」

ダイバーシティ推進室では、出産や子育てにかかわる様々な悩み事に対応するため、助産師を相談員とした「女性の健康相談」を行っています。この相談事業の認知度向上と、子育て中、またはこれから子育てを行う構成員と女性の健康相談員とのネットワークづくりを目的とした相談会を、日野キャンパスと荒川キャンパスで開催しました。

相談会は、参加した教員、職員から毎日の子育てにおける具体的な困りごとや疑問、知りたいことなどが自由に伝えられ、相談員がこれまでの豊富な経験と専門的な知識に基づいた回答やアドバイスを送るという形で進めました。また、相談員からの情報提供のコーナーでは、参加者の関心に合わせて、相談員から専門的な知識に基づいた情報が提供されました。少人数の参加者でしたが、そのぶん相談員との距離も近く、アットホームな雰囲気の中活発に質問が飛び交い、時折は笑い声も起こる楽しい相談会になりました。

これまで、特に日野・荒川キャンパスでは、ダイバーシティ推進室が行っている相談事業があまり知られていなかったようですが、この相談会に教職員が参加し、身近な話題を通じて相談員との直接的な交流が行われたことで、少しずつ認知が拡大していくことが期待されます。ダイバーシティ推進室では、今後も日野・荒川キャンパスでの取組みを続けていく予定です。

**\*ダイバーシティ推進室専門相談 女性の健康相談\***  
電話またはメールでダイバーシティ推進室までご予約ください  
相談担当：女性の健康相談員（助産師）  
相談日時：月曜日～金曜日 10:00～17:00  
相談場所：南大沢キャンパス図書館本館1階 ダイバーシティ推進室  
★他キャンパスへの出張相談も行います  
★子育てのお悩みに関する相談は、性別にかかわらず利用できます



## 編集 後記

今冬の積雪は多かったですね。視覚障がい者や車いすの方は通学もままならず、ダイバーシティ推進室に係わる職員や支援スタッフで、通学路の雪かきをしました。ご協力いただいた皆様ありがとうございました。



首都大学東京 ダイバーシティ推進室  
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1 図書館本館1階  
電話：042-677-1337（直通）／内線 2571 FAX：042-677-1355  
E-Mail：diverwww@tmu.ac.jp  
URL：http://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/  
発行日：2018年3月30日

編集・発行

# No.20 March 2018 Newsletter

## ダイバーシティ通信

TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY  
首都大学東京

## 文化的多様性を持つ構成員交流会

## 折り紙の不思議な世界



ダイバーシティ推進室では、首都大学東京に在籍する外国籍の教職員や留学生同士、および日本人教職員や学生との交流を深めてもらうことを目的として、文化的多様性を持つ構成員交流会を継続的に開催しています。今年は「折り紙の不思議な世界」と題し、2月8日(木)に折り紙の体験を通じた交流会を実施しました。

## Contents

1 文化的多様性を持つ構成員交流会「折り紙の不思議な世界」

2 障がい学生支援懇談会  
障がい者支援スタッフ・利用学生振り返りミーティング  
寄稿「いつの間にかとても大切な存在に」

3 第3回バリアフリー講習会「学生による障がい学生支援の実践」  
コラム「ダイバーシティとスポーツ」

4 ランチタイムレクチャー「ダイバーシティってなんだろう」

子育ての疑問・悩み相談会「子育てのココが聞きたい!!」  
首都大学東京一時保育施設「首都大 KIDS」

者からは羽の部分にきれいに絵柄が浮かび上がるデザインの妙に感心の声が上がりました。最後に、今度は折りあがると国旗の柄になるデザインの紙で鶴を折り、およそ1時間の折り紙体験は終了となりました。

この後、参加者全員が自分で作った兜をかぶり、折りあげた作品を手に、講師を囲んでの記念撮影が行われました。交流会終了後も、参加者同士、また講師との話が弾み、さらなる交流を深めていました。帰り際には「今日のことは忘れない!!」と弾んだ声で感想を伝えてくれた参加者も現れるなど、とても良い雰囲気の中、会を終えることができました。参加者からは、「童心に戻れて楽しかった」「難しいかと思ったが、講師の教え方が丁寧で意外に簡単だった。できあがると嬉しいですね」「とても良い体験ができた」などの感想が寄せられ、折り紙体験を心から楽しんだ様子がかうかがえました。また、今後のイベント希望として、複数の外国籍教職員から茶道の体験会が挙げられたほか、料理や衣服に関する体験イベントを望む声も寄せられました。

\*ダイバーシティ推進室では、今後も日本文化を体験する会や、他文化を学び合う会など、文化的な多様性を持った構成員の交流につながるような取組みを継続していく予定です。「こんなイベントがあると良い」「こういったイベントはどうだろう?」など、みなさまからのご提案も歓迎します。アイデアなどございましたら、ダイバーシティ推進室までお伝えください。  
E-Mail:diverwww@tmu.ac.jp



## 障がい学生支援懇談会

**はじめに** 2月9日(金)に障がい学生支援懇談会を開催しました。この懇談会は、主に聴覚障がい学生の授業を担当した教員と支援に関わる学生・教職員を対象とし、14名が参加しました。また、事前に授業担当教員へのアンケートを実施し、懇談会で回答を共有しました。

**アンケート結果について** 授業担当教員へのアンケートは13名(回収率68.4%)から回答があり、障がいや支援についてより詳細な情報を求める声がありました。また、「合理的配慮を心がけていても、授業進行の関係で配慮を欠いてしまうことがある」という意見もあり、教員の努力だけでは限界があることも読み取れました。一方、授業担当教員と聴覚障がい学生・支援スタッフがコミュニケーションを取っているケースでは支援がスムーズに行われていることも明らかになりました。

**聴覚障がい学生・支援スタッフの報告** 学生の報告では、聴覚障がい学生と支援スタッフが試行錯誤しながら支援を行っており、担当教員の協力、支援技術の向上、支援スタッフの連携の重要性が語られました。

なお、今回の懇談会や授業担当者へのアンケートは、日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム(2017年10月開催)に参加したメンバーが発案し、実現できました。他にも、自主会議や昼休みの「ダイバーカフェ」、スキルアップ講習会を実施するなど、積極的に取り組んでおります。他大学の取り組みが非常に参考になったようです。

**教職員の報告** 教員からは、パソコンノートテイクの画面を確認しながら授業を進めることや、授業後にパソコンノートテイクのログを確認すること、また、授業開始前の年度当初に担当教員へ授業形態についてのアンケートを行うなど、様々な提案がなされました。また、職員からは学生と教員をつなぐ役割の重要性や他キャンパスでの体制整備についての意見がありました。

**意見交換・まとめ** 意見交換では、障がい学生や支援スタッフと担当教員のコミュニケーション方法について具体的な検討がなされました。例えば、リアクションペーパーの活用やダイバーカフェに教員が参加すること等が挙げられました。さらに、色覚障がいの人へ配慮した授業資料の作成など、ダイバーシティ推進の観点に立った授業を広めていくことについての意見がありました。

障がい学生支援をテーマとした学生と教職員の懇談会は初の試みでしたが、今後につながる有意義な時間となりました。



## 2017年度 障がい者支援スタッフ・利用学生 振り返りミーティング

**はじめに** 2月13日(水)に支援スタッフ・利用学生を対象に今年度の障がい学生支援を振り返るミーティングを開催しました。進行は尾崎翔太さん(法学系4年)と町田いづみさん(人文・社会系3年)が行いました。

**今年度の障がい学生支援について** 今年度は支援スタッフが約80名となりましたが、その半数以上が今年度に登録しており、年度初めの募集活動の効果が見られました。関係する企画は、年間で71回実施しました。パソコンノートテイク講習会等の支援者養成講座を前期に行い、理解啓発や環境整備に関係する企画を後期に実施するなど、その時々ニーズに合わせて取り組むことができました。また、日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウムの実践事例コンテストにて、新人賞を受賞するなど対外的な評価も頂き、学生の活躍が目に見える形になってきました。

**次年度の計画** 障がい学生の様々なニーズに対応できるように、年度初めの募集活動や支援者養成講座に注力することを確認しました。次年度は、より一層支援スタッフ同士の関係を深めるため、先輩支援スタッフが募集から養成に積極的に関わることになりました。また、リラックスした雰囲気の中で支援活動について知ってもらいたい、との意見から昼休みに当室にて「ダイバーカフェ」を開催することも検討されています。

**まとめ** 今年度は新たに聴覚障がい学生支援に取り組みましたが、支援スタッフの協力を得ながら進めることができました。その裏には、これまで取り組んできた視覚障がい学生支援の実績があり、その経験が新たな分野に応用されたと考えます。同様に、今年度の取り組みがこれからの障がい学生支援に継承されていくものでしょう。卒業する支援スタッフの経験を次の世代につなげ、安定した支援体制の構築を目指します。



## 2017年度 第3回バリアフリー講習会 「学生による障がい学生支援の実際」

**はじめに** 2月13日(火)に第3回バリアフリー講習会を開催しました。今回は、今年度から取り組んでいる聴覚障がい学生支援について横山正見(ダイバーシティ推進室)、山口翔太さん(聴覚障がい学生)、竹田彩夏さん、田中基之さん、宮崎優子さん(支援スタッフ)が現状と課題、そして展望について話しました。

**本学の障がい学生支援について(横山)** 近年、本学は支援制度の整備を進めており、制度を利用する障がい学生、支援を担う支援スタッフはそれぞれ増加傾向にあるといます。聴覚障がい学生支援について、支援スタッフの協力により、量的なニーズに応えられるようになりましたが、質的なニーズへの対応に課題があります。今後より一層、学生教職員の協力・連携が求められる、と強調しました。

**聴覚障がい学生の報告(山口さん)** 初めての聴覚障がい学生支援のため、入学前は不安もありましたが、すべての授業やセミナーで情報保障を受けることができ、理想的な環境で学ぶことができているといます。しかし、理系授業の支援、教員とのコミュニケーション、他キャンパスでの支援体制の構築等の今後の課題にも言及しました。更に聴覚障がい学生は聴こえる学生に比べて基本的な情報量に差があり、「分からないことが分からない」状況があることを指摘し、聴覚障がい学生が対等に学ぶことは容易ではない、と話しました。

**支援スタッフの報告(竹田さん、田中さん、宮崎さん)** それぞれ、手話講習会やガイダンスでの告知、教員の紹介で支援活動に興味を持ち、支援講習会や見学体験を経て支援技術を身につけました。竹田さんは、支援における困りごとは学生同士で話し合うことや、ダイバーシティ推

進室や教務課と連携して解決を図るといいます。田中さんは、数学の授業を文字通訳で伝えることには限界があり、教員の協力が欠かせないと指摘しました。宮崎さんはダイバーシティ推進室の相談機能、居場所機能が支援活動を支えていると話し、他キャンパスでの支援体制整備についても言及しました。

**質疑応答** 他大学で障がい学生支援に関わる学生から、聴覚障がい学生の在籍がなくなった際の支援活動の継続について質問がありました。環境整備に取り組むことや、大学が連携して実施する研修会の活用、学生同士の交流会など様々なアイデアが出されました。

**アンケート・まとめ** 以下、アンケートを紹介します。「大変良かった。学生の本音、ダイバーシティ推進室の機能の理解を得ることができました」(職員)、「初の聴覚障がい学生の入学で準備等大変だったと思いますが、当事者と支援員がともに工夫して、より良い大学生活を創っている様子が素晴らしいかったです。来年度、協力したいです」(学生)、「授業のやり方にも大いに工夫の余地があると思った。自分の授業に障がいのある学生が参加することになったら、支援スタッフの人とよく協力したい」(教員)、「山口さんに、ダイバー室がわが家のようなと言われることが、先輩としてとても嬉しかったです。発表の方々お疲れさまでした」(学生)等、好意的なご意見を頂きました。

学生が登場する講習会は初の試みでしたが、各自がこの1年の経験から現状や課題を指摘し、今後の展望を考える講習会となりました。支援者の募集や技術の向上、他キャンパスとの連携など具体的な課題について、学生とともに取り組んでいきます。



**ダイバーシティとスポーツ**  
**「セクシュアル・マイノリティとスポーツ」**  
スポーツの世界で、自らがセクシュアル・マイノリティであることを公表するアスリートが増えています。セクシュアル・マイノリティとスポーツに関する情報を発信しているWebサイト「Outsports」によれば、自身がセクシュアル・マイノリティであることを明らかにしてオリンピック大会に参加した選手の数は、冬季は2014年のソチ大会の7人から2018年の平昌大会では15人に、夏季は2012年のロンドン大会の23人から2016年のリオデジャネイロ大会では56人に、それぞれ大きく増えていると言います。こうした傾向から、この記事では「2020年のオリンピック東京大会では、100人のセクシュアル・マイノリティの選手が参加するだろう」と予測しています(※1)。  
ちよつと実感がかわかないかもしれませんが、100人といえば、オリンピックに出場する選手全体の1%にも満たない人数です。様々な調査結果から、セクシュアル・マイノリティの割合は人口の3〜7%程度と言われているので、実現する可能性は大いにあるでしょう。  
近年になって、セクシュアル・マイノリティに対する社会的な認識は大きく変化し、少しずつ偏見も軽減されつつあります。スポーツの世界で、自身がセクシュアル・マイノリティであることを公表するアスリートが増え始めたのも、こうした社会的変化に伴ったことなのでしょう。しかし、スポーツの世界には、まだホモフォビア(※2)と呼ばれる同性愛者への差別、特に男性同性愛者への差別や侮蔑、暴力などが根強く残っています。また、トランスジェンダー、特にMtF(身体的には男性だが、女性として生きることを望む)のトランスジェンダーアスリートや、男性ホルモン分泌量が平均的な女性よりも非常に多い女性のように、身体のありようが男性・女性のどちらの典型でもないアスリートなどの競技参加については、公平性という観点とともに一人ひとりのスポーツをする権利、基本的人権という観点も相まって、難しい課題が生じています。私たちは、ダイバーシティという視点から、こうした問題に取り組むべき時期に来ていると言えそうです。

\*1...「Outsports」The 2020 Summer Olympics could have 100 out LGBTQ athletes! <https://www.outsports.com/2018/2/25/17023444/summer-olympics-2020-out-lgbtq-athletes>  
\*2...「同性愛嫌悪」と訳され、同性愛者に対する差別的・侮蔑的言動や暴力、憎悪による暴行、無関心などを意味します。

## 「いつの間にかとても大切な存在に」

こんにちは。支援スタッフの戸崎彩菜です。このニューズレターが発行されるとき、私は2年生になるうとしています。去年、ドキドキしながら支援スタッフに登録したことを思い出します。

私が支援スタッフに登録した理由は色々あります。以前ろつ学校の演劇をみて、聴覚障がいに関心があったこと、ダイバーシティ推進室の活動の一つであるセクシュアル・マイノリティ支援に関心があつたことなどです。ですが、一番の決め手は「有償」ということでした。大学内で空きコマに、服装髪型自由でお金を稼げるなんてこんな良いことはない!と思ひ登録しました。最初は単なるアルバイトとしか考えていませんでしたが、いつの間にか支援スタッフとしての活動は、私にとっても大きなものになっていました。

支援スタッフに登録したことで、他の支援スタッフはもちろん、職員の方ともお話しする機会をたくさん得ました。いろいろな人の考え方を聞くことはとても面白いと感じます。様々な人と話す度に価値観が広がって、空っぽの自分が満たされていくような感覚です。素晴らしい仲間と共に活動できることを誇りに思います。今の私にとって、ダイバーシティ推進室はただのバイト先ではなく、なくてはならない大切な場所です。

去年1年間活動し、今年からは先輩になりました。今までお世話になった先輩を見習って活動していきたいです。さらに活動が充実したものになるように努めていきます。

障がい者支援スタッフ

都市教養学部理工学系1年 戸崎彩菜

